

とまこまい びじゅつかん  
 吉小牧の美術館の  
 みりよく つた  
 魅力を伝える

# ぴとこま

第4号  
 2013年1月号

2012年11月10日、改装工事中の博物館の一室で、特別な鑑賞会（※1）が開かれました。

本紙『ぴとこま』を作っている美術館広報部のために企画された展示は、題して『人と自然：それぞれの表現』。吉小牧市博物館の細矢学芸員が人と自然をテーマに、博物館の収蔵作品（※2）から、絵画、コラージュ（※3）、彫刻など全部で9点を選んで展示しました。

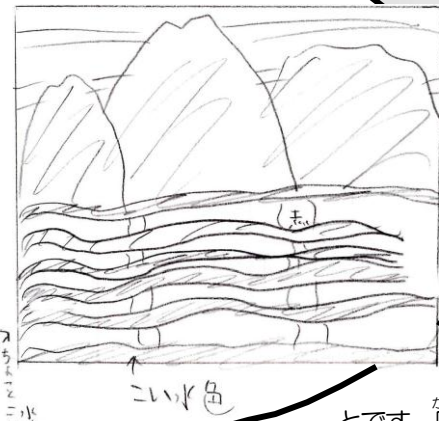
記者たちは、ゆったりと展示された作品を、少し離れたり、ぐっと近づいたり、様々な方向から一人ひとりが自由に鑑賞したあと、気に入った作品の前で、気に入った作品について感じたことをおしゃべりしながらみんなで鑑賞する「対話型鑑賞」に挑戦しました。特に人気のあったのは金属の彫刻『作品』（上田公夫作）で、子ども記者たちは周囲を囲み、あらゆる方向からの見え方を調べたり、光のあて方で影のでき方が変わることを発見したり、みんなで、じっくり見る面白さを体験しました。

※1 鑑賞：芸術作品などを見たり聞いたりして、その良さを味わうこと

※2 博物館の収蔵作品：博物館が持っている作品

※3 コラージュ：雑誌や新聞などを画面にはる表現

私が気に入ったのは喜田村純さんの『風景』という絵と、上田公夫さんの『作品』というオブジェです。『風景』という絵は、風が流れるような不思議な感じの絵でした。絵と文・本村朱里



ちいさなぼくが見た作品の中で喜田村純さんの『風景』という作品に目をひかれました。どうして目をひかれたのかというと、すべて紙でできていたからです。この絵を見ると、風景でも山の風景に見えます。理由は絵の真ん中に山のような紙が貼られているからです。この絵を見て、興味を持ったところは紙で風のように見えるところがあることです。風のように見える理由は、波のようになっていて、風が流れているように見えるからです。

みなさんも、ぜひ見てください。文・的場翔

この白い波みたいな形は、紙を貼ったものだよ。なにを表していると思う？

スペシャル企画☆美術館広報部のための特別展示  
 人と自然：それぞれの表現



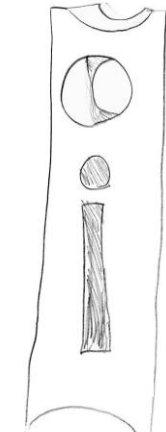
きれい！

すなはま 砂浜にも見える！

海の表面じゃない？

スペシャル企画☆美術館広報部のための特別展示

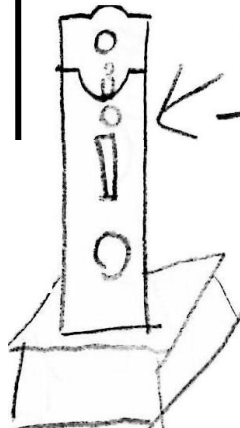
ひと しぜん ひょうげん  
人と自然：それぞれの表現



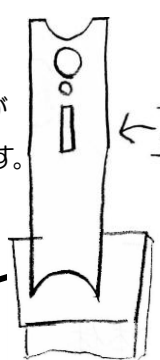
絵・千葉心美

私が気に入った作品は、上田公夫さん作の『作品』というオブジェです。作品の名前が『作品』だなんて不思議でした。それと作品と作品の影の形が違いました。なぜ影と作品の形が違うかは、照明の関係だそうです。

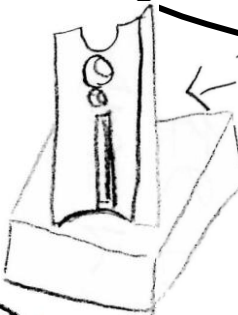
絵と文・山本舞羽



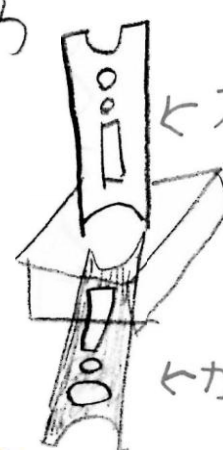
←上から



←正面から



←下から

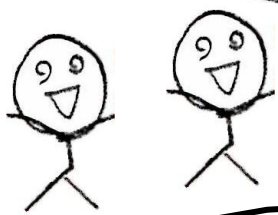


←本体

←台

←かけ

←どこから



博物館広報部向け展示

『人と自然…それぞれの表現』

を見て、絵と彫刻9点の中で僕が気に入ったのは、彫刻の岡沼淳一さんが作った作品です。なぜ気に入ったかという、複雑な形をしていて、木で出来ているところと、色々な角度で見れるところです。

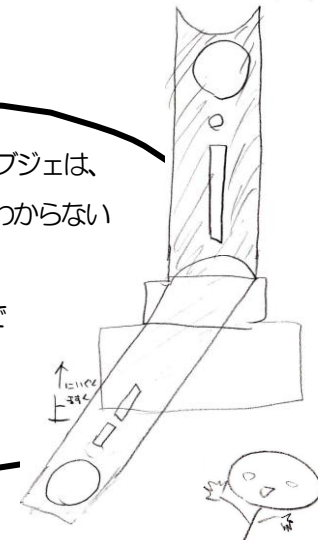
ぜひみなさんも岡沼淳一さんの彫刻を見てください。  
文・佐々木健人



『作品』というオブジェは、何をあらわしているのかわからないような作品でした。

変な形で不思議だったので気に入りました。

絵と文・本村朱里



↑上から

私が気に入ったのは、『ヴァレンシア

アの花祭り』（金崎秀利作）です。あまり祭りの感じはわから

なかったけど、いろんな表情があっっておもしろかったです。人がいっぱい描いてあってすごいと思ったし、写真みたいに絵が上手かったです。絵の全体の色を見たら、赤・緑・茶色などの濃い色が多かったです。花がいっぱい描いてあったので、そこで少しだけ祭りの感じがありました。祭りにシスターがいたのと、あまり笑っていない人がいたのが不思議でした。

文・阿部隋夏



もう一つ気に入った作品があります。中丸茂平さん作の『晩秋』という絵です。とても細かいところまでいねいに描いてあったので気に入りました。文・山本舞羽

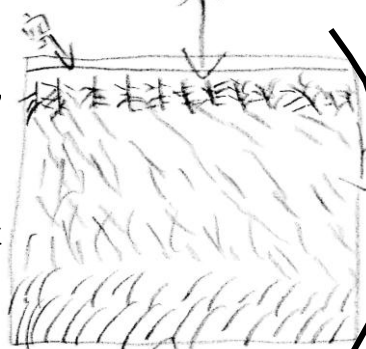


自分が選んだ絵は、風景の絵です。この絵は『晩秋』という絵で、中丸茂平という人が描きました。ぼくがこの絵を見て、感心したところが二つあります。一つ目は、立体感や奥行きがあることです。話を聞くと、この『晩秋』という絵は、一本一本細かく描かれているそうです。ぼくは、「一本一本細かくて、そうとう苦労したんだなあ。」と思いました。二つ目は、遠くの木も、とてもリアルに描かれていることです。一つ目でも書いた通り、一本一本細かく描かれていますが、この木は、ぼくがはじめて見たときに「本物の木みたいだなあ。」と思いました。また、この絵は、秋をモチーフにしているので、とても色があざやかなところがあり、一本一本の色がそれぞれ違います。ぼくはこの絵が好きだったのは、シンプルでも中身がしっかりしているからです。

文・望月王翔

ぼくは、『晩秋』を見て、すごい

なと思いました。ススキがたくさんありました。『晩秋』が一番好きな絵です。中丸茂平さんは、ほかに何を描いているのかなと、思いました。ススキが黄土色で、木の色は、こげ茶色と茶色と黄土色だった。空は白と黄土色だった。ススキもこげ茶色のところもあつた。なんでススキと木だけなんだろうなと思いました。ススキは緑のところもありました。



絵と文・阿部天翔

気に入った作品は、ぬの、写真、絵の具、雑誌の切り抜きのコラージュで表している作品です。日本の雑誌や写真、外国の雑誌や写真が使われていて、その上に絵の具などが塗ってある作品で、すごくおもしろいなと思いました。大友一夫さんの『現代-03』という作品です。絵の具も、黒、青、茶色、白などの色が



あり、

描かれているのがすごく印象に残っています。子どもの落書きみたいですがすごくおもしろいなと思いました。いっしょに見た時は、落書きみたいだなと思ったけど、よくよく見たら、色々な物があったりしてじっくり見ると、おもしろいなと思いました。



作品は意外と大きくて、びっくりしました。また、色々な作品を見てみたいと思いました。

落書きみたいに



## 対話型鑑賞のすすめ

文・菊池りの

とまこまいしほくづかん いろいろなひと  
**古小牧市博物館では、もっと色々な人に、もっと色々な見方で芸術を味わってもらえるように「鑑賞」のお手伝いをしています。学校など**

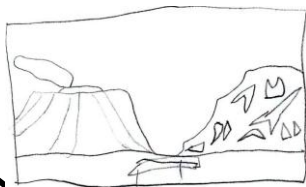
からリクエストがあれば、学芸員が鑑賞する方の年齢や会場などに合わせて選んだ作品を持って行き、

対話型鑑賞の出前授業を行います。

くわしくは、とまこまいしほくづかんまでお問い合わせください。

私が気に入っているのは、たるまえ山の

版画です。版画は版画でも、白と黒ではなく、色のついた版画です。こまかい部分まですみずみに色がついています。作者は川上澄生さんです。記念の版画です。昔は、古小牧町でしたが、このころ古小牧市になったそうです。色で表現できています。もっといろいろな芸術や



美術を見てみたいです。絵と文・浜明白美

# デジタルミュージアムってなあに？



デジタルミュージアムは、博物館の収蔵庫に眠っている絵などを大型のモニターで見てもらうものです。7月にオープンする苫小牧市美術博物館のエントランスロビーに設置される予定です。博物館が所蔵する作品の中からおよそ1,000点を見ることができます。

博物館にある美術作品は収蔵庫で大切に保管されています。その収蔵庫には土足では入れないほど大切にされています。これらの作品一点一点を写真に撮り、作品の名前、作者や作られた年、作り方や材料、大きさなどのデータとともに紹介するのがデジタルミュージアムです。

撮影は、苫小牧市に昔からある志方写真工芸社のスタッフと博物館の学芸員が協力して行われました。一点一点、ていねいに箱から取り出し、本物と同じ色に写すため、いろいろな色の見本が並べられた特別な道具を使って、撮影されていました。(荒井聖、伊藤なつみ、亀卦川菜)



苫小牧市博物館の工事は3月いっぱいまで続き、2013年4月2日に博物館が再開して、7月下旬ごろには(仮称)苫小牧市美術博物館としてオープンします。楽しみにしてください。『びとこま』は、苫小牧市内の小学生が集まって、美術館について調べて書いた新聞です。ぜひ読んでください。(荒井楓)

感想などメッセージをお待ちしています♪

製作：美術館広報部  
 取材：阿部天翔、阿部萌夏、荒井楓、荒井聖、伊藤なつみ、菊池りの、亀卦川菜、熊谷理菜、佐々木健人、佐藤かりん、千葉心美、浜明日美、本村朱里、的場翔、望月王翔、山本真羽  
 編集：小河 けい  
 発行：苫小牧市博物館  
 (お問合せ) 〒053-0011 苫小牧市末広町3丁目9番7号  
 tel 0144(35)2550 fax 0144(34)0408  
 HP www.city.tomakomai.hokkaido.jp/hakubutukan/  
 e-mail hakubutukan@city.tomakomai.hokkaido.jp

(▽)/ 協力をお願い (▽)

「美術館広報部」の記者であることを証明するカードを提示された方は、取材へのご協力をお願いします。疑問点や確認等が必要となる場合、博物館までご連絡をお願いします。